

G・ヴァーベック論⁽¹⁾

古 田 栄 作

序

森 鷗外は「柵草子の本領を論ず⁽²⁾」の劈頭の一節で

「西學の東漸するや、初めてその物を傳へてその心を傳へず。學は則格物窮理、術は則方兵法、世を擧げて西人の機智の民たるを知りて、その徳義の民たるを知らず。況んやその風雅の民たるをや。是に於いてや、世の西學を奉ずるものは、唯利を是れ圖り、財にあらでは喜ばず。椅桐の崇幹も鐘籠の空節も、一たび薪とせられては、復た黄衣の舌、縞裳の肉を煮ることを免れず。天下の人士は殆ど將に彼のプラトオが政策を學びて詩人を逐はんとするに至れり⁽³⁾。」

と書いている。彼が明治二十二（一八八九）年に「今や此方嚮は一轉して、西方の優美なる文學はその深遠なる哲理と共に我疆に入り来れり⁽⁴⁾」と洞察するのは、明治も二十年代に入ってはじめて、「文學」という 利、財に直結しないものへの、冷静な態度が築かれはじめたことを示すものである。

佐久間象山の「東洋道德西洋芸術⁽⁵⁾」や橋本左内の「仁義之道、忠孝之道は吾れより開き、器械之工・芸術之精は彼れより取り⁽⁶⁾」という限定的な、かつ自立性をもつ文化受容の姿勢は、周辺小国という文化的・地理的条件下での文化受容の姿勢でもあった。

大統領M・フィルモアの国書を携えた、武装外交官C・ペリーの来日は、神秘のとばりにとざされていた「孤立した王国」に対する資本主義世界よりの警鐘にとどまるのみならず、未開野蛮なる地日本にキリスト教信仰の光をもたらそうとの祈念にもささえられていた⁽⁷⁾。

G・ヴァーベック論(1)

アメリカ伝道会社派遣の印刷宣教師として中国にいた、S・W・ウィリアムス⁽⁸⁾(衛廉士・衛三畏・衛三畏廉士との中国名でも表記される)は、ペリー提督に頼まれて、広東から主席通訳官として日本遠征隊に参加したが、神奈川条約の締結に際して「日本人がわれわれの優秀性の真の原因を、バイブルの大切な真理から学ぶようになるために、われわれの始めた交渉が、日本人を向上させ浄化するような別の結果をもたらすことを」⁽⁹⁾熱望した。

彼は更に、安政二(一八五五)年十月十三日付の書簡で

日本は活ける愛の宗教を学んでその人民と官吏とが二世紀前にあえてした迫害の誤りを自ら悟らなければならない。そして基督教の伝える平和と清純と温和の信仰を獲得して、かつて基督教に対して抱いていた様な疑惑と恐怖の心を取り去るべきである⁽¹⁰⁾。

と、母国の教会に訴えた。彼は安政五(一八五八)年九月に、長崎に来航した際、日本が「開国」したにもかかわらず、「二世紀前にあえてした迫害の誤り」を自覚していないのみならず、いまだに基督教を「鴉片」視していることを知り驚愕した⁽¹¹⁾。彼は、同行の米国監督教会宣教師E・W・サイル⁽¹²⁾とはかり、軍艦付牧師H・ウッド⁽¹³⁾をまじえた三人の連名で、「真正の基督教」伝道をうながすべく、米国監督教会、米国和蘭改革派教会、米国長老教会の三伝道協会にあてて宣教師の派遣を要請した。この書簡は、伝道の有望なる開始方法として、長崎から江戸に「一宣教師が住居して、彼が日本語を学ぶために能う限りの便宜を与えられる諒解のもとに日本青年に英語を教える事」とした上で、⁽¹⁴⁾

もしミッションが思慮あり忍耐ある人物によって開始されるとするならば、彼は英語の会話・作文を教授することを第一目的とするがよい。そしてその宣教師の伴侶として一医師が加えられ、日本人を診療しながら時々医薬の方法を教えるならば、そして兩人とも靈魂を深く愛して基督に導くことに熱心ならば必ず成功するであろう⁽¹⁵⁾。

彼らは、派遣されるべき宣教師の条件として「忍耐・温和・倦まない親切と、学問的傾向のある人」たることを強調していた。

この具体策にまでふれた勧告は、アメリカの各派伝道協会を刺激することとなり、米国監督派教会のJ・リギンズ⁽¹⁶⁾が、安政六(一八五九)年五月に来崎、続いてCh・M・ウィリアムス⁽¹⁷⁾(米国監督派教会)、J・C・ヘップバーン⁽¹⁸⁾(「ヘボン」平文、米国長老派教会)夫妻、S・R・ブラウン⁽¹⁹⁾、D・B・シモンズ⁽²⁰⁾、C・F・ヴァーベック(米国和蘭改革派教会)が来日した。

本稿では、キリスト教伝道のため来日した、C・F・ヴァーベックの日本での活躍、とくに教育の面での彼のもたらしたものを焦点にあて

つつ、社会変革のさなかでの外国人の与えた影響を考察していききたい。

(1)

ヴァーベックは、一八三〇(天保元)年一月二十三日に、オランダのユトレヒト州のゼイスト⁽²¹⁾の町に生まれた。父のカール(Carl Heinrich Heinrich Willem Verbeek)は、富裕な商人で相当な資産家で、ゼイストの南東の小村のリーゼンブルグ(Rysenburg)の邑長(Burgomaster)であった。ヴァーベック家は、本来、名前の上から、オランダの出自であるが、ドイツとオランダの双方にその後裔が見出される。カールの家系はエンブデンの改革派教会の聖職者を輩出したファン・デア・フリエット(Van der Vliet)家とジンゼンドルフ(Zinzenдорフ)伯爵のゼイストにモラビアン派の施設を建設するという計画に賛同し、ゼイストを購入した、コルネリウス(Cornelius Renatus Van Laer 1731~1792)をはじめ、代々アムステルダムの海軍本部や東インド会社の六つの部局の一つの管理者を輩出した、ファン・ラエル家が結婚によって生まれたものであり、改革派の聖職者の血とモラビアン派に属する、富裕な商人の血が混ざっている。他方、母親(Anna Maria Jacomina Kellerman)の家系は、イタリヤの出自でパラヴィウム(Paravium)の名をもっていたが、宗教改革に際して、新教の教義を受容したため、国外に追われ、ケラーマンの名で、再洗礼派、ピグリム・ファーザーズ、ユグノー、ユダヤ教およびカソリック信者にとっての、「すべての人に対する良心(=信仰)の自由のある」国⁽²²⁾オランダに來た。彼女の父のコーエンラード・ヴィレム・ケラーマン(Coenraad Willem Kellerman)は著名な愛国者であり、ギドーのおば(Cornelia Marie Kellerman [Miesje])は、ゼイストでモラビアン派の女子青年学校(Moravian Young Ladies' Boarding School in Zeist)の校長を三十年以上もつとめる敬虔な婦人であった。すなわち、ギドーの血管に流れる血は、ラテンのおよびゲルマン的なキリスト教精神の最善のものを受けついで血であった⁽²³⁾。

ギドーは、カールおよびアンナ夫妻の八人の子どもの六人目として生まれた。父からは素朴かつまじさという性格を、母からは詩と音楽への愛好を受けついでいた⁽²⁴⁾。

彼の兄や姉は、ルター派の信仰をもつ父の影響のために、アムステルダムの、おじが聖職者として奉職する教会に、教育を受け、確信を深めるため、送られたが、彼の家族もゼイストの人々は礼拝はルター派の教会がゼイストになかったために、いつもモラビアン派の人々と一緒にし

ていた。彼と弟と妹の三人は、ゼイストのモラビアン派の教会に通うばかりでなく、教会員としての所属さえ認められた。モラビアン派の教会員となったことが、彼の米国への移動、宣教師としての来日に少なからぬ影響を与えたようである。というのは、モラビアン派は、極めて敬虔な宗派であり、神の命令に積極的に従おうとし、モラビアン派の聖職者が多く奉職するゼイストの学校では、神の命令を受け、教師が突然教室を去り、海外に布教に赴くことが異例のことではなく、その事が児童・生徒の神の使命への服従と海外へ雄飛する気概を啓培することとなった。ギドー・ヴァーベック少年もこうした鼓吹を受けたのは疑いの余地がない。

裕福なオランダ人が、通常受けるように、ギドー・ヴァーベックも、オランダ語、英語、フランス語、ドイツ語を流暢にかつ正確に使え、ための教育を受け、すべての教科に目ざましい進歩を見せた彼は、とりわけ、オランダ語、フランス語、およびドイツ語に良い成績を得たし、英語は学校で学ぶ前に「コペル」(水路にある宿屋)の子どもとして学習しており、米国に移住後、彼がオランダ人であると疑う人々がほとんどいないほど達者であった。

ギドーの誕生した年は、ヨーロッパで最初の鉄道が敷設された年であり、このことは、機械工学の新時代の開始を告げるものであった。ギドーの将来の方途を決定すべく、家族会議が開かれた時、万場一致でエンジニアリングが彼の将来の職業であるべきだと同意され、ギドーはモラビアン派の学校を卒えると、ユトレヒトの工学校校(Polytechnic School)に入学し、グロッテ(Grote)教授に師事した。工学校卒業後、しばらくの間、ゼイストの鑄造工場に勤務し、青銅、真鍮、鉄等の器物製造に従事していたが、やがて北米に渡って鉄道建設に従事し立身したいとの野心はつり、米国への移住の意志は堅まった。

※

彼の姉のセルマ(Selma)は、結婚して米国に移住していた。セルマの夫のファン・デュール師(Rev. George Van Deurs)の示唆と招き、更にはスカンジナビアの貴族の息子でモラビアン派の西インド宣教師で、ゼイストの裕福なドイツ人の貴婦人と結婚していた、オットー・タンク師(Rev. Otto Tank)のあとを継ぎ、ギドー・ヴァーベックの目は、アメリカに向けられていた。タンク師は、自ら私財を投げ打って、モデル・タウン(タンク・タウン)を作り、オランダ人青年に人生のより大きな機会を与えようとしていた。

ギドー・ヴァーベックは一八五二(嘉永五)年九月にオランダを去り、米国に渡った。彼がニューヨークに着いた時、タンク氏は出迎え、ウイコンシン州のグリーン・ベイ (Green Bay) の近くのタンクタウンへ誘った。彼はタンクタウンのタンク氏の鑄造所で働いた。やがて彼はタンクタウンが永住の地でないと思うようになり、「もっとアメリカを見なければならぬ。自分自身を改善しようところにいなければならぬ。私はよきヤンキーになることを決意した。」⁸³として、名前をアメリカ人になじみやすくするため、ヴァーベック (Verbeck) と変えた。彼は歴史を犠牲にして便益を選択した。⁸⁴かくして彼は「アメリカ人化したオランダ人 (Americanized Dutchman)」への歩みを着々と進めていくのである。

一八五三(嘉永六)年十一月に、姉のセルマ夫妻のブルックリンに行き、アーカンサス州のヘレナ (Helena) で土木技師として働き、橋梁の設計や製図に繁忙な日々を送った。この時期に彼は、日曜日でさえ終日綿畑で働く、悲惨な奴隷の姿に接し、彼の胸の中で成長しつつあったアメリカニズムはうち砕かれていった。それ故彼は福音のよき説教を聞くことに渴え、魂の糧を得ようと熱望した。彼は二十マイルの道を徒歩で行き、ヘンリー・ビーチャー氏 (Mr. Henry Ward Beecher) もしくはワズワース博士 (Dr. Wadworth) の説教を聞くのを楽しみにした。こうした説教を通じて彼はアメリカの宗教の純粋性と鼓吹を知り、宗教的純粋と鼓吹が実践されているのも知った。⁸⁷彼は一八五四年六月十八日に病に倒れ、七月二十四日まで病床に臥した。彼の周囲ではコレラのために誰彼となく次々と昇天していったにもかかわらず、彼は不思議にも健康を回復した。この病が、彼の生涯の転換点となった。「健康が回復されれば、布教の分野で生涯を神に捧げたい。」と繰り返し祈念した。⁸⁸再び歩くようにできるようになってから、グリーン・ベイの姉夫婦のもとで静養し、その後、前の雇主のタンク氏の鑄造工場の管理を委託され(一八五四年の冬から一八五五年の間) 快適に過ごした。

一八五五年の夏からより完全な聖職者になるためにオーバン (Auburn) の神学学校に通っていた、義兄のファン・デュールから、ギドーに対して宣教師になるための準備の学習をするためにオーバンに来るようにとの手紙が来た。翌年の九月に、ギドーはオーバン神学校への入学を認められた。

神学校で彼は学生生活を楽しんだが、其の感情の美しさ、信仰の深さ、頭脳の明晰さ、特に他人に喜びを与えるための自己没却、自己克服の強靱な性向において教師からも敬愛された。一八五九年に神学校を卒業すると学校当局に見こまれて校内の独逸系の人々のために独逸語で説教

する役を仰せつかった。⁽³⁹⁾

一八五八(安政五)年 日蘭条約締結後、長崎に滞在する、S・W・ウィリアムズらからの米国の三伝道団(米国監督教会、米国和蘭改革派教会、米国長老教会)に対して宣教師の日本派遣を求める手紙が送付された。

私は、たった今条約に調印した、オランダ公使のドンケル・クルティウス(Mr. Donker Curtius)氏が、その時に「日本の役人は、阿片とキリスト教を国内に持ち込まない方法が見出されうれば、外国人にすべての貿易上の特権を許容する準備があると彼に告げた」といったことに深く印象づけられた。その時に、E・W・サイルとチャプレン・レンリ・ウッドも長崎に(合衆国の汽船ミネソタ号の船上に)おり、また私たち三人は、真のキリスト教が何であるかを人民に教えうる、日本への宣教師(複数)の指名することを急がせるため、米国監督教会、米国和蘭改革派教会および米国長老教会の伝道委員会の理事長に手紙を送付することに同意した。来年中に私たちすべてはこれら三つの教会の代表者の会合を上海でもてたならぬ⁽⁴⁰⁾

このS・ウェルズ・ウィリアムズら三人の日本からのアピールを受けた、米国改革派教会(≡米国和蘭改革派教会の後身)の総会(海外布教のための月例礼拝集会)は、一八五九(安政六)年二月に、

日本人民は古来オランダ人民と友情をもって接し、今やアメリカ人民に対してもよき関係をもとうとするように、オランダ人民とアメリカ人民を代表する、米国改革派教会は、すべての他の教会に先んじて、この三千万の魂の国に福音をもたらすべきである。⁽⁴¹⁾

と決議し、サウス・リフォームド教会の二人の長老が各々、毎年八百ドルを日本への宣教師を支援するために与えることに同意し、教会としては三人目の宣教師の支援することに同意した。この申し出を感謝して受け、そうであったように、弾薬車(のような国)へ行き、静かにかつ何年間もほとんど知られず、またおそらく成功の徴候もなく働くことを喜んで、勇敢で忠実な男を捜しはじめた。一人は宣教師で二人は宣教師であり、そのうちの一人は「アメリカ人化したオランダ人」でなければならぬとされた。幹事が一ドルを確保し、開拓者として適切な人を捜し始める前でさえ、S・R・ブラウン博士の行くという申し出があり、その時でさえブラウンは同僚を捜していた。⁽⁴²⁾

「ギドー・ヴァーベックの宣教師日誌」は「アメリカ人化したオランダ人」がどのように捜され、見出され、派遣されたかを次のように語っている。

一八五九年一月の中旬頃、オーバンの第一長老派教会の、神学博士のチャールズ・ホーレイ師 (Rev. Charles Hawley) がはじめて私に、アメリカ人化したオランダ人が日本に行く宣教師として、和蘭改革派教会から求められていると告げた。ホーレイ氏が私をスカダー (Scudder) 博士に推薦してからほぼ一週間後に、S・ブラウン氏が同じ用件で私に会いに来て、一月二十二日に私に、私がニューヨークの和蘭改革派の伝道委員会に彼 (＝ブラウン) とともに来るよう招待されていると告げた。二十日に私は、理事である、アイザック・フェリス (Isaac Ferris) (1798～1873) 博士に手紙を送り、二十八日の金曜日に、ブラウン夫妻とともにニューヨークに行った。フィラデルフィアに行き、委員会の会議がもたれる、一月三十一日午後三時に、ゲオルゲ・ファン・デュールとともにニューヨークに戻った。・・・二月十六日付 (の手紙) で私は、按手式の指令等とともにフェリス博士によって (日本派遣宣教師として) 指名を受けた。三月二十二日に私はカユガ (Cayuga) 市の第二長老派教会で、長老から午後一時三〇分に福音伝道者としての免許を与えられ、午後七時に按手式を受けた。

翌日 (午前) 十一時に私はカユガのオランダ改革派教会の教職籍をもつメンバーとして受理された。⁽⁴⁵⁾

四月十八日にフィラデルフィアでギドー・ヴァーベックはマリア・マニオン (Maria Manion) と結婚した。結婚に先立って、彼は三月二十八日から三十一日までの間、アメリカ国籍取得のためにオーバニー (Albany) に赴いたが、和蘭国籍の移転が不明瞭であったために徒労に帰し、ために彼は終生無国籍者で通さねばならなかった。⁽⁴⁶⁾

一八五九年五月七日、ヴァーベック夫妻を含む、宣教師の一行はニューヨークを出帆し、六月三十日に喜望峰に達し、八月二十五日香港に寄港、十月十七日に上海に着いた。

一行は日和待ち (baffling wind) のため香港で約一ヶ月停泊せねばならなかったが、ヴァーベックはそこで、ウィリアム・アッシュモア師 (Rev. William Ashmore) に会った⁽⁴⁸⁾、またスコットランド・ドイツ・イングランドの宣教師に会い、また上海では十月十七日にC・E・ブリッジマン (Bridgman) 師⁽⁴⁹⁾、E・W・サイル師、S・ウェルズ・ウィリアムズ氏およびチャプレン・ヘンリウッド (サイル、ウィリアムズ、ウッド) の三人は長崎から、米国の三教派に対して宣教師の日本派遣を要請する書簡を送付した三人) に会い、協議の後に、ブラウン博士とシモンズ博士は、上海で家族から離れて直ちに神奈川へ行くのが最も適切であり、十月二十一日に神奈川のヘボン博士の住む成仏寺に仮偶を定め、同

年十二月二十九日には夫人たちも神奈川に着いた。上海でのサイルらとの協議により、ヴァーベックは冬を上海で過ごし、語学の学習をした後に、翌春長崎に向かうべきだとされたが、彼はウィリアムズ博士らと協議して、直ちに長崎に向かうことを決心し、妻を上海に残して、一八五九(安政六)年十一月七日の晩に長崎港に到着した。⁶⁰⁾

(2)

長崎に上陸したヴァーベックは、まず米国領事館を訪ねた。米国籍を得ることはできなかったが領事の配慮で米国婦化人として保護を受けることはできた。⁶¹⁾その後、領事館の雇用している日本人下僕の案内で、崇福寺の裏山にある広徳院に、米国宣教師J・リギンズ⁶²⁾(米国聖公会)、Ch・M・ウィリアムズ⁶³⁾(米国聖公会)を訪ねた。彼は当座の家を広徳院境内の広徳庵に定め、十二月二十九日には上海から呼びよせた妻のマリアもこの広徳庵で生活することとなった。和蘭生れのヴァーベックは出島で安全に生活することが出来たが、日本伝道の使命に情熱を燃やす彼は、敢えて伝道の機会を求めて、民間に住家を求めたのである。⁶⁴⁾

一八六〇年一月二十六日(≡万延元年正月四日)に女兒が誕生した。「日本が開国して最初のキリスト教徒の誕生です。一週間、健康そうにみえたが、二週目には病気で衰弱し、今月(二月)九日、この小さい生命は、主に召されてしまいました。死ぬ前の安息日には、わたしはこの娘にバプテスマを授け、『エンマ、ジャポニカ(Emma Japonica)』と名づけました。今後、数世紀にわたる日本で最初の幼児洗礼でありました。」⁶⁵⁾と悲喜こもごもの経験の報告をしている。翌年一月一八日には、男児(ウィリアムズ Williams)誕生。丈夫で健康に育っているこの子をささづかったことに対し、ヴァーベックは神の慈愛と感謝し、この子が育つ条件が、エンマの時よりずっと整っており、乳児室の整備、保温装置(ストーブ)の整備、より温暖な気候、宣教医H・E・シュミット⁶⁶⁾(Schmidt)の存在を列挙している。⁶⁷⁾こうした中で、伝道への礎石は固められていた。一八六一年三月十六日付の書簡では「一昨日、一人の日本の役人に「四福音書」を与える機会があつて喜んでゐる次第です。この役人は長崎からかなり離れた所にいる友人に右の聖書を送り届けたのです。以前にもキリスト教の真理を書いた小冊子を彼に与えたことがありました。ところが、同じ問題についてもっと詳しく書いた書物を欲しいといつて来たので、前述の福音書と丁良謹⁶⁸⁾(マーチン)の『天道溯源』、いずれも漢文の書籍を与えたのです。主がこれを多くの手に渡して、その心を開きたまわんことを！」⁶⁹⁾と報告した上で、聖職の日本語訳につい

ての意見を述べている。

(一) ヘボン博士もブラウン師も、わたしも、いな三人とも現在では、聖書の日本語訳はその真理を、日本人の四分の一位の、教育ある階層に、すなわち漢文の聖書が読める程度の人々にしか理解されないと考えます。少なくとも、まず日本語をもっと完全に理解して初めて、将来、役立つようになると思っています。

(二) 聖書は霊的な真理です。わたしたちの日本語の教師はまだ何らの知識も有していませんので、今のところ、マルコ伝または聖書の他の書か、わたしたちの指導で漢訳の聖書から、日本文に訳し直す位しかできません。漢文の聖書そのものが批評をうけないとはいえません。中国人だって聖書を理解していません。ただ漢文の聖書は、翻訳のために日本人の異教徒には基礎となりうるのです。すなわち翻訳というわけです。

(三) 日本人は漢文の書物を受け入れるし、最近では宣教師の出版した漢文の聖書も見られます。しかし、日本人のために書いた宗教書は見ようとしません。彼等はその意図をさとしてそのなりゆきを恐れ、当局を恐れています。わたしはベッテルハイム博士の日本語の『路加伝』をもっていますので、ある日本人に見せたところが、漢文の聖書をみたときには別にどうもなかった彼が、この日本語訳をみたときはおじていました。そこでわたしも考えたのですが、この恐怖心や偏見がなくなってしまうまでは、漢文の聖書は十分に立ち、そして神の祝福と導きによって立派な翻訳を完成することができるでしょう。しかし、問題はこれだけに限りません。これと相並行してやる仕事があります、すなわち、科学、芸術、語学の各部門にわたり、翻訳出版すべきでしょう。わたしはブラウン師の（聖書翻訳の）意図が、やがてもっと具体的になることに敬意を表します。わたしもその希望もっています。しかし、日本語の十分の研究によって初めてその希望が直接に達成され、翻訳は比較的容易で、かつ急速に行なわれ、その後はじめて聖書翻訳の完成を見ることができると思います。

端的には、聖書の日本語への翻訳は、語学上の問題、翻訳補佐者のキリスト教、聖書理解の欠如・不足、日本人のキリスト教への恐怖心等々から「時機尚早」であり、単に聖書に限定される翻訳出版ではなく、科学、芸術、語学の各部門に亘る翻訳出版を望んでいるのであり、西洋文明の一端としてキリスト教の伝道の可能性を求めようとする「戦略的」姿勢を示すものであろう。

彼は、長崎での一年余の活動を年報として次のように報告している。

わたしたちの宣教事業は（一八六〇年）一月一日から開始されました。妻がわずか三日前に到着したので、その時まで安定しませんでした。わたしはその前から日本人の教師を雇って日本語の研究に着手していました。一月の第二週は特別な初週祈禱のときとして守りました。神奈川の宣教師等と協同し、すべてのミッションや教会に対して本部から送られてきた万国福音同盟の訴えに答えて、初週祈禱会を行ないました。こうして、神の恵みをうけてわたしたちの宣教事業を心から喜んで始めたのです。その後まもなく、この年のうち最もはげしい試験にあいました。可愛いわたしの子、エンマ・ジャポニカの死でした（二月九日）、その誕生はわずか二週間前でした。その後この一年間、別に変わったことはありませんでした。

語学の研究はわたしの日課でした。わたしの研究は少数の英学生を指導するために、時々さえぎられました。四人の英学生（その一人は通訳でした）は、三期間、着実に出席していました。最初は約二倍でしたが、一クラスにすることができなかったので四人以外はおことわりしました。うち二人が役所で階級が二つくらい上がったので、新しく入学を志願する者が殺到しましたが、これを辞退しました。英学生を教えることにはかなり貴重な時間をとりましたが、一般的な感化力は決して悪くありませんでした。しかし生徒の学力が進むにつれて、将来、一週間一回だけ暗誦の時間を限定しようと思っています。

J・リギンズ師⁶⁶（米国監督教会派遣の）が二月にここを出発しましたので、中国のミッション印刷所の書物の販売と頒布の責任をわたしが負いました。その月から次の書物を売却しました。

上海のロンドン・ミッションの印刷所から

ムアヘッドの地理学（二巻、七二〇ページ） 一四部

ウィリアムソンの植物学（一九六ページ） 二二部

代数学（二巻） 一二部

代数幾何学（三巻） 一二部

ムアヘッドの英国史（二巻） 二部

クリスチャン・アルマナック（七〇ページ） 九六部

上海通報（各一四部） 三四部

ハーシエルの天文学（三卷） 三四部

ホブソンの医学書（五卷） 三八部

ドクトル・レグの智環啓蒙（香港版一一〇ページ） 一四部

寧坡長老ミッション印刷所から

ウエーの地理学（二四四ページ） 五八部

寧坡通報（パンフレット） 七五〇部

宗教史の略訳（主要な宗教の教義、カトリックとプロテスタントとの相違等を翻訳したもの（七八ページ）） 一四部

丁健良 『天道溯源』^(マヤ)（一五二ページ） 三部

聖經真理概説（一九四ページ） 二部

ミルンの両友論（トラクト六八ページ） 三部

合計 四九六冊、および小冊子八四六部

宗教書を主とする以上の書籍は現在、大部分、両刀をさした立派な武士階級の手にはわたされませんでした。わたしたちの働きは、これらの人々から始められなければなりません。初代教会では、初め、福音が貧しい人々に伝えられました。たしかに主はみこころのままにその聖業を行ないたもうことでしょうが、しかし、われわれの見てこの^(マヤ)独得の社会に、この国民の^(マヤ)特種な社会的、布民的組織を深く観察しうる限りでは、宣教は高い社会階層の人々から始めるべきであると考えようになりました。少なくともこれらの人々の一般的承諾が得られるまで、それ以外にはとても不可能だとするならば、やはり、そうする他はないと思います。漢籍をよみうる教育ある人々として、以上の武士階級に対してはわれわれは、中国の宣教師の出版した漢籍をもって、物静かに福音を彼らに伝えるという方法を直ちに採用しうるのです。多くの書籍は、日本の軍艦によって直接江戸に送ることができています。最近歴史に関する書籍と宗教の重要な教義に関するもの、カトリックとプロテスタントの区別を指摘し、この国のことにも言及した新しい書籍を受け取りました。右の書二冊を都に近い大阪から来た二人

G・ヴァーベック論(1)

の武士に与えました。数日後これらの紳士は、「もっと広範囲にわたり宗教を論じた書籍を求めてきましたので、わたしは丁良謹(テイリョウキン)の『天道溯源』と『聖經真理概説』を与えたところ、非常に嬉しそうでした。彼等が再びもっと専門的な書籍を求めて来ることを期待しています。

その場合には漢文の聖書を与えるつもりです。多くの人々は今では、これらの外国書籍を求めてわたしの家に来ます。彼等は私の居所と人物とを知っていますから、今後はだんだん科学書の販売をやめ、その代わりに宗教書ばかりを紹介するつもりです。しかし、科学書を買うに出来る場合でも、わたしが書籍販売人ではなく、これらの書籍は日本が学ばねばならないものであるから、日本人にこれらを紹介しているということの人々は、はっきり知っています。それに、わたしはこれらの書籍を多く日本人にも与えたいし、全くそうする方がよいのです。

英学生の指導(英学生の二人が昇進したこともあって、志望者は殺到したが)、中国のミッション印刷所の書物の頒布と販売にかなりの時間と労力を割きながら、文明の紹介者として、伝道の希望をもって、自らの語学学習を継続するという日常の生活の中で、ヴァーベックは、キリスト教やキリスト教に関する書籍への質問、講読要求に胸躍らせながら対処していく。そのことが社会的矛盾を最も重く負担させられている最下層の人々への福音の伝道にならないことに一抹の不満を抱きながらも、支配者階級であり、識字層である武士に、物静かに福音を説こうとしたのであった。既に武士階級の中には、西洋諸国の器物を見聞し、その優秀性を認めるものも少なくなく、機械芸術(≡技術)は西洋に学ぶべきであるとの主張もうまれていた。小論の冒頭で考察した佐久間象山・橋本左内の論はその典型といえよう。更には琉球でのベッテルハイムの路傍伝道の不成功という事実が教えたのもあろう。機械芸術の優秀性をひろめる中でその基底にある宗教の伝道を模索したものである。その入口にあたるのが、言語の教授であり、宗教とは直接には関係しない、地理学、植物学、代数学、代数幾何学、天文学、医学書の頒布・販売であった。時は既に西洋の科学技術の優秀性を確認したのである。ヴァーベックに求められた書籍、小冊子は圧倒的に宗教書が多数を占めているのである。識者の中には、西洋文明の全体像の探究が、国家の危機の深まりの中で始まりつつあったとさえ考えられる。

一八六一年九月一二日の長崎からの書簡は、

今は何のさまたげもなく、研究に専念しております。でも機会あるごとに、よい書籍頒布を計っています。八月九日、上海から漢文の聖書を受け取りました。その荷物をあげようとした時、以前数回、わたしを訪ねたことのある紳士が別れを告げに来ました。彼は翌日一〇〇マイル以上も離れた自分の国に帰るので、この人は喜んで、聖書、新約聖書一冊と、半ダースばかりの小冊子を受け取りこれらの書物を故

郷の友人に読ませると約束しました。その時から、なお三冊聖書をよい人々の手に渡すことができず。兄弟よ、わたしのこの伝道の端緒は些細なことでありませぬ。特殊な人々の間で、特殊な地位にあるわたしたちにとっては、このように始めることが大切なのです。書物を読める人々に聖書を与える、そして機会ある毎に新旧約全書を与え、中国で宣教師が聖書を戸毎に、路傍で、街頭で、頒布する自由を得ているようにこの国で得られる日の来るまで、その機会を求め、苦心して創るようにすることが大切です。そうした祝福された時が、いつ来るか、また聖書を語り得る時がいつ来るか、わたしたちにはわかりませぬ。主にありて労苦するものには、やがてその労の空しくないことがわかるでしょう。主はその日を早めたもうでしょう。わたしたちが主に忠実であらんことを祈って下さい。⁶¹

と、述べ、一八六一年の年報では

わたしたちは、今までに、この国で確固とした地盤を得、民衆と当局者の信頼を得ました。さらにまた、民衆の中に住んでわたしたちの目的が平和的なもの、公平な精神であることを立証したので、かなり交友の範囲を広げ、従って感化力を深めました。これらの事柄や、過去にうけた神のめぐみを大いなる将来の保証と感じて、今までよりも、もっと勇気をだして、わたしたちの伝道活動の分野を恒久的な有力なものとしなければなりません。しかしこれがすべてではありません。これまでの鎖国していた国が、以前より広く、有効に門戸を開放するようになったことは、過去一二月の間に起こった多くの事件によって示されていますが、なかでも、政府が国民に対し外国の港で貿易をする許可を与え、すでにその目的で外国船を買い入れ、さらに欧米諸国の宮廷に使節を派遣する意図がありますが、この国民と政府の考えを啓発するのに貢献するには相違ありません。開国の過程は遅々としていますが、それにもかかわらず、着々と進んできました。現在の状況から考えると、日本人の偏見と排外的精神は朝日の前に消え去る暗黒のようにまもなく外国の影響の前に消えさることは極めて確実です。こうした変化が商業上の繁栄、科学的な進歩および市民社会の発達の時代を招来するばかりでなく、また主の光のさん然と輝く「主の日」の来ることを確信しないで、おられませうか。この国民が、外国人のもつ悪しきものばかりを受容して、あらゆるものにまさって、よきものを受け容れないということがあり得ませうか。

他のところで申し上げたように、わたしは日本文法書を編集して今までに出版しておく意向でした。ホフマン教授のオランダ文法書の翻訳をやってゆくに従って、益々その著作の正確さと価値のあることがわかりました。しかしまた、同時にその断片的な性質と配列の具合が

らみて、完全に組織的な文法書となるまでには、しなければならぬ多くの苦心と研究とが必要であり、時間を要することがわかったので。そこで、日本文法書の出版を延期することを、そちらの実行委員会で決定したことが六月にわかったので、わたしは失望どころかむしろホッとしたわけです。この決定のを知って、なお十分に、かつ完璧を期するようにこの著作と取り組んでみたいと思います。

過去一カ年にわたって、進歩をみたのは語学です。今後もお相当、時間をかけて研究しなければならぬのは語学です。十分な語学力がなければ、他の障^(マヤ)碍を乗り越えても何もなりません。

教えることについて、一カ年を通じ七名の英学生がおりまして、その内三名は政府の通訳で、残りのものは、英学研究の目的で他の藩主から派遣されたり、または自発的にやって来た役人または学生たちです。それらの中でも、上達した学生には漢文と英文の聖書を与え、それを読んで比較対照するように、勧めています。無論、研究のためでもありますが、宗教上の教えとしても、読むように勧めています。これらの学生たちには、ミッシェンの出版部で刊行している初級と、第一リーダーを読ませております。その中の一人だけが、宗教に関心をもっているらしく、いつも聖書を研究しております。

前回の報告で申し上げたように、だんだん科学的な書籍の販売を中止し、その代りに宗教書だけを紹介するつもりでいます。七月以来そうしています。その結果か、書籍の注文が減りました。けれども宗教書を買いたいものも少なからずあるし、聖書を、また他の聖籍を買いたいものでも、宗教的な小冊子とか聖書を受け取っている者があり、これらの経験によって見ると、より科学的な著作の販売は、有用な知識の普及は別としても、帝国のあらゆる地域のすぐれた階層の人々と接触する、すばらしい手段となるのです。何かとくに宗教上の問題について、十分に語ることができれば、再びこの方法を選んでみたいと思っています。

一カ年に取り扱った漢文の書籍は次の通りです。

科学、歴史、地理に関する著作、大部分上海のロンドン・ミッシェンの印刷所のもので、一六〇冊。

宗教に関するパンフレットや小冊子、一七〇冊

漢文の聖書、一九冊、

英文の聖書、二冊

漢文の新約聖書、一八冊

英文の新約聖書、三冊

ベッテルハイム（伯徳令）博士の日本語訳 路加伝福音書、六冊

ミッシェン出版部の初級および第一リーダー、各二〇冊

以上の書籍や聖書は今、優秀な人々の手にわたり、これらを読んで、内容について、なかなかすぐれた理解をしています。他の藩から別別にやって来た二人の役人が聖書を受け取って、二人ともその藩主に、これを献上したいと申し出ております。果たして彼等は真実にそうするかどうかわかりませんが、しかし、とにかくこれらの人々が、この聖書に対し重要性を感じていることを示しています。聖書を受け取ったものはほとんど異口同音に、友人に貸して読ませたいと言っています。

聖書や宗教上の小冊子を、わたしは人々に売らずに与えています。その一つは友人にやりたいからと言って来た仏教の僧侶に与えました。また二冊の聖書を知人の役人が江戸に持って行きました。与えた聖書や宗教書の数はまだ僅かです。しかしこれは、わずか過去三カ月の結果にすぎませんが、なお需要は増加しています。その上、今までのところ、求めた人々に与えただけです。これは手はじめで、一つの実験です。つい先達で、有名な英国の旅行者が同氏の意見として申し出ておりましたが、「聖書を受けとることは、日本人には死刑をともしう」と、これは、以前なら承認しないわけにゆかなかったかも知りませんが、現在では、わたしはこれを承認しませんし、今後も、わたしは適当な機会ある毎に、聖書を日本人に与えることを躊躇しません。ベッテルハイム博士訳のルカ伝は誤訳があるため、与える時に注意することを怠ってはなりません。ですから漢文のテキストがついていなければ、頒布には適しません。わたしの生徒にその一冊を渡ししました。彼は立派な学者であると推挙する友人と一緒に写し直したいと言うのです。その訳文と二つの異なる漢訳と蘭文、英文の聖書と前の訳文とを比較して誤謬を訂正するつもりでありました。この比較研究でかなりよい結果が得られると思っていたところ、九月になって、わたしは失望しました。その生徒が故郷の大阪に帰って手紙をよこしたのです。それに次のように書いてありました、「聖書の翻訳はやっていません、日本では法に反しているからです。先生すみませんが中止のやむなきに至った次第です。後日お会いして申し上げます」と文意（本人の英文が不完全なので——原注）がはっきりしませんが、たしか辞退の意味らしく、本人がここに帰ってから手紙に託し得ない何

かを話したのでありましょう。多分親戚か友人かが本人の評判か何かを傷つけるような仕事にたずさわらぬように説得したのでしょう。彼自身はこの翻訳の仕事と宗教問題に対して熱心な関心をもって見えたのですが、生徒たちのことを申しますと、日本では青年だけが好學心をもっているばかりでなく、三〇歳以上のものも三〇歳以下の者と同様に持っています。新しい言語を学びたいと言ってきた四〇歳ばかりの日本人が、日本の産業や進歩について、述べていました。キリスト教について日本人と興味ある会話をしたことを記録にとどめてもよいけれど、それはかなり割引してきかなくてはなりません。日本人は好奇心にかられて求道するので、「救われるためにどうすればよいか」という点を学びたいのではないようですから。

と、一年間の活動の成果として、民衆と当局者の信頼を獲得し、民衆の中での交友の範囲をかなり広げ、民衆への感化力を深めていると見做し、英学教授が継続され、七名の英学生のうち一名が宗教に関心を示し、常に聖書の研究に勤しんでいると報告している。更に彼の頒布販売した書籍、冊子については、宗教書のみを扱うとの方針から、大中に減少していると報告しているが、宗教書を中心にした書籍の取り扱いの中で、聖書が藩主への献上を前提に求められたり、宗教書を友人に貸して読ませたいとの、聖書やキリスト教理解に対して積極的な姿勢が生まれていると報じているし、日本人が青・壮・老年のすべての年齢層で好學心をもつが、キリスト教に対しては「救済」を求めめるのではなく、好奇心にかられて究明したいとの科学的精神で受けとめようとして見えている。社会的・政治的危機に直面して、支配者として選択を迫られている状況の下で、現実に如何に対応すべきかを模索する姿勢が、未知のものを撰取しようとの好學心として、年令を問わずまれているのであろう。それ故に、宗教に対しても科学技術と同様の姿勢で対処しようとする事となり、撰取しようとし、「魂の救済」を求めると姿勢は稀薄で、そのためにヴァーベックにとってはその姿勢が好奇心にかられての求道と映るのであろう。

一八六二年八月二六日付の長崎発の書簡は

わたしは日本において三人の着実な聖書の読者について記録します。一人はわたしの家におり、その日本人と関連ある二人はここから八〇マイルばかり離れた肥前の国の首府にいる方々です。それはいつかの手紙で申し上げたことのある、わたしから聖書を受けとった人々です。二週間前、この三人組の一人が、政府の用務を帯びて当地に来ていくつかの不明の点の説明をもとめるため、わたしにも会いに来ました。三人はいずれも立派な学者であり、新約聖書の英訳、蘭訳および二種類のちがった漢訳をもっているのですが、まだ解らない点がある

のは当然のことです。この一人は英学修業のため藩主から派遣されて来たので、暫く長崎に住んでいます。昨日の朝、わたしのところに来て、正規の日課とは別に彼のために英訳の聖書を読んで下さらぬかと申したのです。これは彼自身ばかりでなく肥前にいる二人の友人の希望でもあると言うのです。そうすれば、二人の友人も自分と同じ聖書の個所を学べるからとのことでした。それは、彼自身がわたしの説明などによって、学習したところを二人の友人に伝えられるからとのことでした。無論わたしは、この申し出を承認したばかりでなく、むしろ本人の提案を激励したのです。それでこの日本のニコデモは（夜来るから）約束どおりその日やって来てマタイによる福音書の第一章を読みました。今後、一週間に二回つづけて来ることでしよう。⁶³

と、奇怪な形態をとる聖書の読書会の成立を報告している。この書簡の言う、ヴァーベックの家に同居していた男が、肥前藩家老、村田若狭の家臣の本野周蔵であり、藩務で長崎に向し、不明の点の説明を求めたのが、若狭の弟の綾部恭であり、肥前の国の首府にいる男が村田若狭である。村田は海岸警備の任についていた時、海岸をパトロール中に海上を漂う、タイプ印刷のもので、しっかりととじられた小さな本で、いままでに見たことのない言語で綴られた本を発見し、回収して、その解読をしようとした。調査の結果、その小さな本は、宇宙の創造者と、主の精神と真理を教えた、イエスについての本であり、道徳と宗教についても言及しているものであることが明らかにされ、家臣を長崎に派遣し、より詳細な調査をさせる中で、この本の漢訳本があり、漢訳本を入手するために家臣を中国に遣してそれを手に入れ、また漢訳の新訳聖書の研究を佐賀の地で進めていたのである。村田がこのように熱心にキリスト教研究をすすめる契機を与えたものは、オランダ人から贈られた、セバストポール (Sebastopol) の攻城の絵であった。この絵に深い感銘を受けた彼は、キリスト教諸国は何らかの秘密をもっているのではないかと考え、その秘密を解明したいと考えていたから、海上から回収した本がキリスト教に関する本であることが判明した時、キリスト教諸国の秘密を明らかにしてくれるものであろうと期待したのであった。⁶⁴この村田の熱意が、本野を中継者とする、奇怪な学習会を誕生させるのであるが、本野が英学学習のため藩から派遣された留学生であり、英訳聖書の読解が多少はできたという事実が、村田や綾部の漢訳聖書による理解を深め、ヴァーベックの指導が、理解を深めるとともに、正確なものに仕上げていくのである。この奇怪な学習会の成果は、一八六六（慶応二年）の村田、綾部、本野の洗礼という形で実るのである。

一八六二（文久二）年の年報では

G・ヴァーベック論(1)

語学の研究がわたしの主な仕事でした。この点で多少の進歩をいたしました。そのことについては一般的な興味は別に申し上げるほどのことはありません。わたしは文法について論文を書きたいのですが、ここでは申し上げません。現在および将来とも日本語の使用、その成果を考えると、語学研究は大切であり、なすべき仕事です。

書籍の頒布については、色々な理由から、一、二年前のように大量ではなくなりました。しかし多分、以前よりも、よりよい方向に頒布されています。「一巻の聖書は、一人の無言の宣教師であり」、さらに一冊のキリスト教書籍は一人の無音の教師でもあります。よい結果が常に得られるというわたしたちの希望はますます広がって行くと思います。「生命の言」は一般庶民の手にわたっています。願わくは彼等が心に聖言をうけいれるよう導かれて、その靈性の救われんことを祈ってやみません。

頒布された書籍は次の通りです。

漢訳聖書一九冊、漢訳聖書(新約・旧約)八冊、英蘭訳聖書(米国聖書協会刊)一四冊、中国宣教印刷所刊の諸書及び小冊子(内数冊は丁良驥^(マ)の名著『天道溯源』^(マ))、新しい上海通報(定期刊行物)四〇〇冊、頒布に適するものですが、資金不足のために刊行を中止しました。記録しておかなければならぬ最も重要で興味ある事実は、昨年、バイブルクラスを設けたことです。もっと詳細に説明すると、読書の注意をひくでしょう。昨年末までに四名の聖書研究者がありました。一週間に二、三時間、一定の時間に来ており、今もつづいています。その一人は独りでやって来ましたが、これがわたしの最初の生徒でした。彼はほとんど「創世記」を読みおわり、「ヨハネによる福音書」をかなりよく読んでいます。もう一人の生徒はこの春以来出席していましたが、ハンカのため隣の藩の彼の家之余儀なく帰り、その後秋になって、他に二人の人を伴って帰って来ました。これらの三人のものは、この港に英学研究の施設があるので藩主から派遣されて来たのです。一週間二度わたしの所に来て、「ヨハネによる福音書」を読んでもりましたが、なかなかよくできるようになりました。わたしは一年ばかり前に、その一人に聖書やその他の書籍を与えておったのですが、彼はここに来る以前すでに漢訳の福音書を知識ある日本人ならば読み得る程度で、読んでいたのです。なお、そうした方法で使徒行伝やパウロ書翰などを下読みして来ています。(漢文で書かれたものは訓点とか助詞をつけて日本文の語序に合わせることによって、多少教育のある日本人は漢文のテキストを読み得るのです。)彼等三人の外にむろん多少関係あるものですが、もう一人います。外国語は全然知らないけれど、その家庭で漢訳の聖書を読んでおり、私のバイブルクラ

スで他の生徒が学んでいるのを快く思っている者で、わたしも、まだ会ったことはありませんが、クラスの第五番目の生徒と認めたいと思います。

なお一層の教化と奨励のため、わたしは次の所見を述べます。これらのバイブルクラスの生徒たち一人一人はそのままわたしの英学生となったわけです。英語の授業はあまり役に立たない骨折り仕事だと時には考えながらも、わたしの時間を精一杯用い辛抱したわけですが、神の摂理によって、よい結果を生じたのです。バイブルクラスの授業をすすめる方法はこうです。まず聖句を、その個所の意味を理解させるために、必要な場合、蘭語または漢文の聖書と比較しながら、日本語に訳し、それから、その解釈や適用や、例をあげて説明するので

す。

もう一つの特徴は、こうした動きが自発的であったことです。彼等生徒たちが自発的にやって来て聖書を読むことを助けてもらいたいと願い出たのです。むしろ彼等は藩主や上役に仕えている人々ですから、利益を得る目的、それは間接であるけれども、物質的利益や恩顧をうける目的でやって来ているので、このようにして近づいて来る者に、宣教師たちの苦情が出ることもあるのは無理ありませんが、しかし、こうしたバイブルクラス参加は、彼等にとっては危険をおかしてのこと、多分大きな危険でしょう。しかも、それは何ら出世を保証するものではありません。むしろ迫害を覚悟しなければなりません。出世のためには軍事上の技術を研究しなければなりません。しかしそれは平和の君の天下の学ではありません。危険についての考察は根拠がないわけではありません。これを示すために、次の事実をあげておきます。それは最近わたしが調べた二つの事実です。わたしの生徒たちと同じ社会的地位の人で以前わたしのバイブルクラスに参加したことのある人なのですが、数日前その人に、なお聖書を読んでいますかと尋ねましたところ、彼はこう答えました。「毎夜ひそかに読んでいます。そのことが知られたら大変危険ですから」と、彼は「当局は聖書の内容と目的とを知らないし、キリシタン禁制とそれに関連した危険があるから」と答えたのです。もう一つはある一人の医師が聖書を返却してきました。こういう書物を所持しているのが見つかる危険だからという理由でした。これは一般の人々の意見です。しかしわたしの生徒は自ら進んでやって来た人々なので、迫害の危険を恐れず、いなむしる危険をおかして来た勇敢な連中であって、ただただよい将来より自由な時代の来るのを待ち望んでいる連中ではありません。これらの聖書研究の生徒は、いずれも学殖あり、ある程度、日本の社会的地位のある者です。高い地位というわけではないけれど、下層階級と上流

階級との間の中産層およびそれ以上の人々です。いつか将来日本にはこうした中産層の市民が多くなるでしょう。わたしはこうした階層を愛しています。しかし現在ここでは、キリスト教が論争されており、禁制の宗教ですが、われらのプロテスタント教会と切支丹宗門と教理的な関係をよく理解されることが大切です。すなわち、切支丹宗門の布教が死と残酷とを生じ、禁制の宗門となっているのです。ここに知性を有する尊敬すべき人々がキリシタン禁制を緩和する決意と意見とをもってこの国の支配者たちに対し、福音の主張をアピールするのが唯一の途であります。一般民衆からのこのようなアピールはかえってきびしさを増大し、人心を刺激して困難に陥ることになりましょう。しかし、主はすべてのことをよくなし給う。主のめぐみ深き意思は必ず実現するでしょう。これらの生徒たちは、他のことよりも次の点において進歩の一つを示しております。わたしたちが初めてここに来た時、キリスト教について、どの人も同じように、びくびくしていました。話すときでも、書物や小冊子をわたしから受けとるときでも、そうでした。ある者などは、ただ単にわたしの家に来るときえ他人に知られることを恐れていました。秘密は日本人には必要と考えられたのです。それで二人の人が一緒にいて、それが知人であつてもお互いに信用できず、キリスト教の問題を切り出す勇気がなかなか出なかったのです。ところが、今では、二、三人が一緒に来て聖書を読み、われわれの信仰について自由に話しあっています。ミッションの出版物や聖書なども、彼らの藩内に送り届けたり、さらに天皇がおられる都にさえも送られているのです。この都は帝国における文学と学問の中心であります。ここには古典や稀覯書がもっとも尊ばれ、熱心に愛読されているのです。「沈黙の宣教師」たる聖書が、天皇の手にわたらぬにしても、宮殿の中にまで届けられるということがあり得ないとは思いません。神よ願わくは、あらゆる場所に、その他の所にキリストの福音を日本人に伝え、教えたまわんことをノしかし、この福音を証する勇気はまだ一般的に普及していません。二つの例を挙げてみましょう。

生徒の一人のことですが、彼の読んだものに興味を持つに至ったことから、驚くべき幾多の信仰上の展開を見るに至りました。彼は自分で一度以上、新約聖書を通読し、わたしのところに来る前に前述の方法で漢訳聖書を日本文に直し、解釈していました。ある意味では福音の種が処女地に落ちたのです。しかし、先入観、迷信、ある宗教、これらはみな誤りであり、罪深いもので、それがみなわたしたちの道に障碍(障害)となっているので、これを排除しなければなりません。不道徳、かたくなな心情、知性の迷盲は、見苦しく、悲惨です。これらの点を考えると、わたしたちは、暫くわれらの期待をおさえ、屈せず堪えしのばなければなりません。すでにくさびは打ちこまれたのです。われ

らはその結果を待つばかりです。とくに神の言は急速で力づく、諸刃の剣よりも鋭いからです。軽んじてはならぬことは、あなた方やわたしたちの祈りです。どうかわれらが神の聖旨に忠実ならむことを、この国民の心が開かれて、彼等がわれらの救い主を受けいれ信じるよつに、そうすればわたしたちは救い主の恩恵の勝利を見、かつ聴くことを期待することができます。

と、報告している。この年報の全容は、はしがき(略)、一、語学研究、一、書籍頒布、一、バイブルクラスの発足とその特徴およびその発展のための彼(『ヴァーベック』)の見解によって構成されているが、さきの引用からも明らかのように、その大半がバイブルクラスへの言及に占められている。彼がバイブルクラスの発足を「福音の種が処女地に落ちたのです」と評するのは、キリスト教が「切支丹邪宗門」とされ、国禁とされた中で、禁を犯しての福音伝道は困難を極めている中での、キリスト教(プロテスタントであり、ザビエルらによってもたらされた、カソリックとは異なる宗派のものであるが)への正しい理解をもとうとする者が出現し、その学習が定着しつつあることへの喜びの表現であると思われる。軍事研究その他のために、藩から派遣され、芸(『技』)術の習得が彼らの目的であり、それをすることが出世の糧になるが、敢えて身の危険を顧慮せず、真理を求めて自発的に学習会に参加していることへの敬意をこめた表現であろう。バイブルクラスの五名の生徒は、八月二六日付の書簡での、村田若狭(六二年の年報での第五番目の生徒)、綾部恭、本野周蔵の三人を当然含むものであろうが、他の二人は詳かではない。

生麦事件による薩英戦争の風説が長崎に伝わり、安全確保のために、六三年四月二七日にはとりあえず出島に避難(一八六三島四月二八日長崎出島発書簡⁶⁷⁾、更に五月には上海へ避難(長崎発五月一三日、一六日上海着、五月二二日付 上海発書簡⁶⁸⁾、ほぼ半年上海で過ごし、十月四日上海を発ち、一三日長崎に戻り(六三年一〇月四日付および十一月一四日付書簡⁶⁹⁾、しばらく出島に住むが、六四年二月二七日には、以前住んでいた家に戻る。(六四年三月五日付書簡⁷⁰⁾ 国際的紛争のさなかでも日本人のキリスト教への関心は高まり、二日間で中国語のキリスト教書籍が二百冊以上も販売されると報告もみられる。⁷¹⁾

生麦事件に端を発した薩英戦争、萩藩の下関海峡での米・蘭・仏船の砲撃、英米蘭仏の四国連合艦隊の下関砲撃は、攘夷が不可能であるばかりでなく、日本国にも、国民にも有害無益であることが徐々に、当局者にも国民にも知られるようになった。

実は、新しい地域に移転したこと、また今度当地の官立の学校の校長兼、教師の職務を引き受けることになったからです。⁷²⁾

昨年夏上海から帰って来た時、長崎奉行から話があつて、最初わたしがここに来た当時、すなわち一八六〇年にわたしが英語を教へていた二人の生徒は役所で二度も昇進していましたが、その英語の熟達ぶりに満足の意を表し、長崎で幕府所管の学校(済美館)の外国の学問と語学を受け持つためわたしを招聘する旨を奉行が江戸表に行った時、幕府に上申したということでした。わたしとしては、この申し出は、通達者の儀礼だと考えていたので、そんなことをあなた(ペルツ師)に申し上げては、空しい自慢となると思つて手紙に書かなかつたのです。ところが六月中旬、合衆国の領事が、上記の奉行からの申し出を受けたので、わたしの意向をただし、わたしが、こうした責任を引き受ける意志があるかどうか、もし引き受ける場合、どんな条件かと、きかれたのです。その後、わたしは米國領事とともに奉行と会見して左のような取りきめとなりました。それによつて、本(一八六四年八月二日から、一週間に五日間、一日二時間学校で教へ始めました。すなわち、土曜日と日曜日を除き、毎日午前九時から一時まで教へることとなつたのです。右の条件としてわたしは年一、二〇〇ドルに該当する金額を支給して欲しいと申し出ました。これは、奉行としても、江戸幕府に相談しなければ支給できないので、その交渉をしたようですから、そのうち、回答が得られると思ひます。こちらからの提案が受け容れられるかどうかは、横浜の同労者の事情如何に、多少関係があるでしょう。横浜で、同じようなとりきめをしたことがあつたと聞いています。横浜では多分無給で教へていましょう。しかしその取り極め(マヤ)の詳細については何も聞いておりません。こちらの学校では英語、算術および有用な科学の概要を教へることになっております。将来のためによいことなのです。しかしわたしの考えでは研究の時間を放棄出来ない宣教師には時間の割合には効果は上がらないと思ひます。ただ自然科学と語学を教へる以外にやるべきことがたくさんあるのです。それですから、無給でこうした責任を引き受けられなかつたのです。そればかりでなく、横暴な政府にわちし自身があまり安くあつかわれるのはよい策であるとは考えられないのです。政府にまかせておくと、有用な人間の時間と労力とを、漆器とか、鶏卵などの安い物で勝手気ままにお礼にかえるからです。こういう取り極め(マヤ)は、当ミッションとしてはかなりの時間を犠牲にして何らかの効果を得られないし、伝道協会の本部としても、その給料を払っている以上、つまらぬ報酬で派遣宣教師を使われたくないのは当然のことです。無論、わたしは、学校経営の責任を引き受けましたが、同時に伝道協会からの容認による条件を申し出たのです。わたしは、現在、一、二〇〇ドル(米本國の価値の二倍に該当しますが)が為替交替の比率として、伝道協会本部にとって適當と思はれる給料であると考えたのです。もし伝道協会がそうおっしゃるならば、学校をやめることも報

酬をことわることも、やさしいことです。学校で教えることの方法や科目については、あとからお知らせいたします。学校の施設の他の件もむろんのことです。

世界から孤立した存在から脱出を迫られるという日本の状況が、英語の能力をより強く必要とし、ヴァーベックの英語教育の成果が高く評価され、新しく校長兼教師として就任を要請されたのである。官立学校の校長の職は、時間的および労力上の犠牲を要求するばかりでなく、官立という学校形態の伴う、教育上の制約も少なくない。そうした中で彼は、週五日、一日二時間、更し英語ばかりでなく自然科学をも教えるという職務を、年一、二〇〇ドルの条件で引き受ける。それは学校運営を委ねられることが魅力であったかとさえ思われる。おそらく、学校教育の成果が彼自身の能力と努力の成果と評価につながり、福音伝道によい影響をもたらされることを期待しえたからであろう。

わたしが、この地に設立された政府の学校に関し、取った手続(マテ)に対し、ミッション本部でも満足されたことをうけたまわり嬉しく存じます。この学校（済美館）は別に変わったことなく経営されており、生徒の学力もかなり進んでいます。当局者もわたしの教授ぶりに満足している様子です。当局者は新校舎を建築中で、一〇〇名以上の生徒を収容して二カ月以内に開く予定です。しかしわたしの直接教授する生徒は上級のクラスです。

一カ月余り前に学者としての名声ある日本語の新しい教師を得ました。わたしが前の教師と一緒にやっていた注解附の『小信仰回答』の翻訳をやっています。印刷ができるようになったら、この種の経費の予算がありませんから、その支払(マテ)については、学校からの手当の一部をさいて使う外ありません。

今朝（一八六五年六月五日）、聡明な日本人が訪問してくださいましてわたしの心は喜びと感謝(マテ)に満ちております。というのはその人が漢訳の聖書を五冊ばかり欲しいと申し出たからです。わたしは上海の長老ミッションの印刷所から、多数の聖書、その他の書物を受け取りました。ちょうどいい時にそれらが到着したので大勢買求めに來ます。今ほど、そうした訪問客がやってきたことは、これまでになかったほどです。

済美館の教育は順調に進み、規模の拡大が進められることとなった。彼は、上級クラスのみを担当することになり、宣教師としての本来の職責を全うすべく、『小信仰回答』の翻訳を新しい日本語教師とともにすゝめており、漢訳聖書をはじめ、聖書、その他の書籍の頒布が聖書をは

じめとする書籍を求める訪問客の来訪により、極めて好調に進展していくようになった。それは、日本が世界から孤立した存在たりえず、薩英戦争、下関砲撃という国際的紛糾を経験する中で、西洋文明、物質的文明に限らず、それを支える宗教への関心の高まりと深まりが、英学熱や聖書その他のヴァーベックの頒布する書籍の購入としてあらわれている。この時期に彼は、日本での伝道の初穂を得る。一八六二(文久二)年八月より、バイブルクラスで聖書を学習してきた、村田若狭、綾部恭、本野周蔵の三名が、六六(慶応二)年五月二〇日のペンテコステ(Pentecost)〔五旬節〕の日に、ヴァーベックから洗礼を受けた。村田が佐賀藩の家老であったことは再三述べてきた通りであり、若狭が二人の息子に対しても信仰に導くことを希望し、「われわれには他の者に洗礼を授けることはできないでしょうか——いや、それは、不可能です。ご承知でしょうが佐賀の自分の友人等の幾人かは衷心からバプテスマをうけたいと望んでおり、その機会を待っているものがあるので、そうしたいたい愚かにも気おって考えたのです。」と、洗礼直後に語っている。若狭は単に、本野や綾部を介して、ヴァーベックの指導するバイブルクラスの一員であるばかりでなく、彼自身も漢訳聖書などをもって、別の「バイブルクラス」を主宰していたと考えられる。つまり、本野、綾部、村田、そしてその中核にヴァーベックという「バイブルクラス」のネットワークが形成されていたものと考えらるべきであろう。このネットワークが有効に作用しているために、衷心からバプテスマを受けたい人々が佐賀藩内に数人生まれてきたと思われる。

慶応二年(一八六六)、長崎に佐賀藩の英学校「致遠館」が設立されると、ここでもヴァーベックは教鞭をとることを委嘱され、彼は英語に加え、西洋の政況・法律・経済・算術を教えた。この「致遠館」は、大隈の奔走により、長崎在住の商人からの寄附金を調達する、特異な学校であり、そのことが、他藩の人士、公家の子弟にも広く門扉を開放する学校となり、大隈重信、岩倉具定、岩倉具経、岩倉具綱、岩倉具儀、石橋重朝、丹羽竜之助、中島永江、江副廉造、中野建明らが学び、岩倉具視、副島種臣、高杉晋作、伊藤博文、井上馨、後藤象二郎、小松帯刀、西郷隆盛、西郷従道らも、「致遠館」で教鞭を執るヴァーベックの学識と人徳を敬慕して、「致遠館」に出入りした。ヴァーベックは、J・M・フェリス師宛の一八六八(明治元)年五月四日付の書簡で「一年あまり前に副島と大隈の二人の有望な生徒を教えました。これら二人は新約聖書の大部分と米国憲法の全部とをわたしと一緒に勉強しました。」と回想しており、大隈も「致遠館」などでの基督教の学習を「余等は当時の一般人士と同じく基督教を以て国家に危害あるものと思へり。然るに、余等先に英書を学ぶに当り、毎々良師を欠きしを以て已むを得ず、基督教の宣教師を称せられたるウ・キ・リ・ア・ム、^(マ)并にフルベッキ等に就て英書の質問をなし、且其講義を聴きしをありしか、少年者の好奇心と

して側ら基督教の事をも研究せんと思立たり。当時、基督教は猶嚴禁なりしも、学理上より研究するは毫も不可なるを信したるを以て、余は副島と共に凡そ一ヶ年半の間之か研究を為せり。然れども彼等の言ふ所は、大概淺薄にして、恰も怪談奇話を聴くか如く、学識あるものに向つては格別の価値なしを思へり。只、余等は其ために又多少發明したる所なきにあらず。即ち基督教は是まで世人の目したるか如く邪說魔法の分子を含むものにあらずして、等しく社会の人心に向つて道德を保持するを目的とするものなるを知りしなり。簡単に言へば、基督教なる者の大体を知り得たりしなり」と回顧しており、新約聖書の学習を「基督教の学理上の研究」と位置づけ、その結果、基督教が彼等（大隈と副島）にとつて「格別の価値なし」ととらえるが、副産物として、「基督教＝邪宗」觀を否定するに至るのである。これは、信教の自由を求め、伝道の自由を求めるヴァーベックにとつては大きな収獲であつたことは論を俟たない。この書簡においても、ヴァーベックは

ドイツ語の祈禱書

英語の改訂祈禱書（大型で立派な製本のもの）

米國憲法

A・バーネットのキリスト教証拠論

ビーチャーのキリスト伝⁽⁸²⁾

の送付を求め、一八六八年一月一六日付のJ・M・フェリス師宛の書簡でも

学校用のノート著、自然哲学

同書 小型本

商業事典

民法

刑法

ウェーランドの經濟原論

同 // (近刊)

G・ヴァーベック論(1)

ダナ編 ホイートン 国際公法

ウルゼーの国際公法

統計学の標準的な図書

ストーレーの合衆国憲法積義

合衆国憲法(小冊子)⁸³⁾

という書籍の購入方を依頼している。宣教師として派遣されながらも、福音の伝道者としてより、文明の啓発者として我々の眼に映るのはこうした書籍の販売・頒布・学校での教育の姿がより大きくうかびあがっているからにほかならない。一二月一九日付書簡で、仏教の僧侶へのバプテスマ、村田若狭の息子と家臣の医師へのバプテスマを報告し、肥前藩主への訪問およびキリスト教による藩校設立の要請を村田からうけたと報じている。⁸⁴⁾この二つの要請のうち、前者のみに承諾の返答を与え、藩校教育には代理人としてスタウトを紹介し、⁸⁵⁾維新政府の招聘に応え、長崎の地をあとにする。

(未完)

註

- (1) Verbeek Guido Fridolin (1830～1898)。日本基督教団出版局「キリスト教人名辞典」では見出しに、*ハヴァーベック* (フルベッキ)。ギード・ヘルマン・フリードリッヒと、英音読みの表記を用いているので、本稿ではこの表記にしたがうことにする。日本では蘭音読みのフルベッキないしはフルベックと表記されることもある。オランダに生れ、米国に移住し(アメリカで Verbeek へヴァーベック)を Verbeck と改名している)、オランダ改革派教会 (Dutch Reformed Church in America) から日本に派遣された宣教師。
- (2) この論文は「柵草子」第一号(明治二十二年十月)に掲載された。署名は S.S.S (新聲社の略記。新聲社は「柵草子」の発行所。鷗外がドイツ留学より帰朝後まもなく、市村鑽次郎、井上通泰、落合直文、小金井喜美子、三木竹二らを集めてつくった文学結社)となっているが、鷗外の筆であることは明らかとされている。筑摩全集類聚 森 鷗外全集七 二八六頁および二八八頁参照
- (3) 森 鷗外 「柵草紙の本領を論ず」、前掲 森 鷗外全集七 三頁
- (4) 同前
- (5) 佐久間 象山 「省魯録」 岩波書店日本思想大系 9 「渡辺 華山、高野長英、横井小楠、橋本左内」所収 二四四頁。象山は、「君子に五の樂あり。し

かうして、富貴は与からず。一門礼義を知りて、骨肉罅隙なきは、一の楽なり。取予苟くもせず、廉潔自から養ひ、内には妻孥に愧ぢず、外には衆民に忤ぢざるは、二の楽なり。聖学を講明し、心に大道を識り、時に随ひ義に安んじ、險に処ること夷のごときは、三の楽なり。西人が理窟を啓くの後に生れて、古の聖賢のいまだ嘗て識らざるところの理を知るは四の楽なり。東洋道德、西洋芸術精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもって民物を沢し、国恩に報ゆるは、五の楽なり。」と、孟子の三楽「君子有三楽、而主天下、与存焉、父母俱存、兄弟無故、一楽也、仰不愧於天、俯不作於人、二楽也、得天下英才、而教育之、三楽也」(尽心章句上、岩波文庫版「孟子」下 三四〇頁)を基に孟子の三楽の「英才への教育」を三楽、四楽、五楽と自らの修養として位置づけているように思われ、「民物を沢し、国恩に報ゆる」と、民生安定とともに社会的義務として国家への奉仕を唱えているところに興深いものがある。原文は漢文で下記の通りである。

君子有五楽、而富貴不与焉、一門知礼義、骨肉無罅隙、一楽也、取予不苟、廉潔自養、内不愧於妻孥、外不作於衆民、二楽也、講明聖学、心識大道、隨時安義、処險如夷、三楽也、生乎西人啓理窟之後、而知之古聖賢所未嘗識之理、四楽也、東洋道德、西洋芸術、精粗不遺、表裏兼該、因以沢民物、報国恩、五楽也。

(6) 橋本左内「安政四年十一月四日付村田氏壽氏宛書簡」(『橋本景岳全集』二、四七一―二頁)。象山の「東洋道德、西洋芸術」と同様の主張であることは論を俟たない。平川祐弘「和魂洋才の系譜」三五頁など参照。

(7) 大濱徹也「明治キリスト教会史の研究」六頁。以下の言及は、この著書を参照した。

(8) Samuel Wells Williams (1812~1884)。宣教師、外交官、シナ学者。印刷業者で書籍商の父 William Williams がアメリカ対外宣教委員会 (the American Board of Commissioners for Foreign Mission) の廣東印刷所の印刷人を指名推薦することを依頼され、息子のサミュエルにそれを勧め、彼は受諾し、一八三二年から一八三三年四数カ月間、父親の指導のもとに印刷業を学ぶ。一八三三年、中国に渡る。それから二十三年にわたる宣教師としての生活を中国で送り、月刊誌「チャイニーズ・レポジトリ」(The Chinese Repository)の編集、印刷の監督に、さらに広東方言の辞典と文法書の刊行準備に没頭する。一八四五年から四八年の帰米中に、「中国総論」(The Middle Kingdom)を執筆・刊行。一八三七年の夏、広東のアメリカ商人オリファント (D. W. C. Oliphant) が、マカオで保護されていた音吉ら七人の難波船水夫を故国に送還し、これを利用して日本と貿易を開き、さらにアメリカ対外宣教委員会の日本布教を実現させようと計り、ウィリアムズに参加を要請して、マカオからモリソン号を日本に派遣したが、この計画は成功しなかった(「モリソン号事件」)。モリソン号に同乗したことで彼は、難波水夫の一人から日本語を学び、「馬太伝」、「創世紀」の日本語訳を完成した。一八五三年に、彼はペリー提督から通訳として日本遠征に参加して欲しいと要請されて、随行し、「ペリー日本遠征随行記」(The Journal of the Perry expedition to Japan)を著わした。S・W・ウィリアムズ「ペリー日本遠征随行記」(洞富雄訳)の洞による解説とF・W・ウィリアムズの序説を参照した。

(9) S・W・ウィリアムズ、「ペリー日本遠征随行記」二四六頁

(10) S・W・ウィリアムズは、中国に帰任後、一八五五年十月十三日付書簡で日本道が急務なることを訴えた。それは、米国監督教会機関紙「スピリット・オブ・ミッションズ」に掲載され、全米の諸教会員の興味をよんだ。引用は日本聖公会歴史編纂委員会編「日本聖公会百年史」五頁より重引。大濱徹也、前掲書七頁および十九頁参照。尚、佐波互編「植村正久とその時代」(一)では、一八五七年十月三日付の米艦ボウツマウス乗組の一将校の在上海の宣教師宛の書簡を紹介

介している。(二一九〜二二〇頁)

此条約は、千八百五十八年七月四日より実施せらるべき規定に候。……宣教師は此地に於て英語研究を切望する人民を発見すべく、学校も速かに開設し得らるべく候。福音の真理に關しては之を伝ふる方法は、所謂蛇の如く智かるべき事に候。兎に角國語學習に長日月を要し候へば、来るべき者は、明年七月四日後早々渡来あり度候、支那語の素養あらば國語研究上利する所多かるべしと存候。氣候は略ぼ本國と同じく、やや温和にして、熱病赤痢等は無之、地球上これほど健康に適する土地は無かるべしと存候。……

小官は上海出立の折りに、斯くも勇み進んで通信を認め得らるるとは思も懸げざりしが、当地に來りて……特別な興味を以て日本に注目いたし居り候。而して見識と信仰に富める人士が、此國の伝道の為に選定せらるゝことを眞実に希望致し候。福音は分國の民に宣伝せらるべしとあり、されば何人も福音は此國に到らずと弁疏し能はざる可く候。諸國諸民は福音宣伝者に開かれざる可からず、而して聖旨によしとし給はゞ、神の撰理に由り何れの國何れの民も、福音宣伝のため開かれ候。今や大能の聖手は日本の上に働き給ふ、此國の開港は単に通商を許諾したりといふよりは、より以上の意義を有し候。此は恰かも間隙に楔子を打込む如く、福音の真理を此國に打込み得べき端緒、此処にありてふ事を表示するものに候。是ぞ神が日本帝國の人心を吾人に向つて啓かしめたる所以に候。……

千八百五十七年十月三日 日本 函館

亜米利加合衆國ボウツマウス艦

一士官

(元田作之進、「老監督ウイリアムス」)

(11) 佐波巨編 「植村正久とその時代」(一)、二二八〜二二九頁参照

(12) Edward. W. Syle (1817〜1890)、漢名師利。米國聖公會の長老で、元來は上海方面に活躍した宣教師であり、支那では伝道の傍ら貧盲の救済事業に力を入れたり、又英國亞細亞協會北支那支部の設立発起人の一人であったり、更に語學に堪能であったので聖書の漢訳事業に従事したり、多方面に活躍した。

一八五八(安政五)年九月に、在支長老派のウキリアムス博士及び改革派のウッド牧師とともに長崎に來航。日本伝道の必要を痛感したので、この三人は各本國のミッションにこの事を慫慂した。

彼は明治初年に再び來日し、横浜英國領事館付牧師となり、横浜のクライスト教會の牧師を兼ねた。

明治七年十一月から明治十二年四月まで開成學校の哲學及び歴史の教師となった。哲學の名目でヘーブンの「心理学」を講じたが、これはわが國における最初の心理学の講義であった。(佐波 巨編、前掲書二二二頁〜二二六頁参照)

(13) Henry Chaplain Woodのこと。米國軍艦ボウハタン Powhatan の軍艦付の改革派の牧師として、一八五八(安政五)年九月に長崎に來航。S. W. ウキリアムスおよびE. W. サイルとともに日本に宣教師を派遣するよう、米國の監督派、長老派及び改革派の伝道局に書簡を送付した。佐波巨編、前掲書 二二八頁〜二三〇頁参照

(14) 「スピリット・オブ・ミッションズ」一八五九年二月(前掲「日本聖公會百年史」一一頁より重引)

(15) 同前

(16) John Liggins (1829~1912) 漢名材約翰。日本最初の新教宣教師。英国生まれで、十二歳のときに、フィラデルフィアに移住。一八五五(安政二)年に、ニューヨークの昇天教会の伝道師となり、同年十月、チャニング・M. ウィリアムズとともに、米国聖公会の外国伝道委員会から支那宣教師に任命され、上海に向かう。一八五九年四月、伝道地の江蘇省常熟で暴徒に乱暴狼藉を受け、病後(マラリヤ熱に一八五七年罹患一の身体がいちじりしく衰弱し、転地療養のため同年五月長崎に来航。通詞に英語を教えることを条件に条約実施以前に長崎に上陸居住を許され、崇福寺境内の一家屋を無料で提供される。同月米国伝道局から日本への転任命令を受ける。

彼は八名の日本人通詞に毎週月・水・金の三日英語を教え、日本語を彼らから学んだ。日本人通詞に英語を教えるかたわら将来の伝道に備えて、基督教禁制下の日本人の基督教に対する偏見をのぞく手段として、支那在留宣教師が著わした漢訳の世界地理、歴史書をはじめ基督教を加味した科学書等の輸入につとめ、広くこれらの書を頒布する等、当時のわが国の文明開眼の方面にも貢献するところが大きかった。安政六(一八五九)年八月十日長崎発書簡(「スピリッツ・オブ・ミッションズ」一八六〇年二月号に掲載)によると、当時リギンズが頒布した漢訳書はおよそ十一種類あり、すでに千部以上が上流の日本人間に購入されたという。

日本へ渡米後僅かに十カ月足らずで、マラリヤ熱が再発し、やむなく一八六〇(万延元)年、帰国の途についた。

彼は、長崎滞在中に「Familiar Phrase in English and Romanized Japanese」を編集、上海で上梓。(この本は、一八六七年の再版では「One Thousand Familiar Phrases in English and Romanized Japanese」と改題され、ニューヨークで刊行。その三版は「Conversations in English and Japanese」と更に改題され、大阪の竜章堂から「米国リグジンズ氏著 英対訳通弁書」の書名で発行された)

彼は 一八六二年から一九〇〇年にわたり、「スピリッツ・オブ・ミッションズ」に寄稿し、その間約二十年間は同誌の海外記事担当の主筆補として活躍した。(Who's Who in America, 1911版) (佐波巨編、前掲書二二九頁~二四一頁、昭和女子大学近代文学研究室編「近代文学研究叢書」第十二卷二九五頁~三三八頁参照)

(17) Channing Moore Williams (1829~1910)。米国監督派の宣教師。リギンズとともに上海へ渡り、常熟などで伝道活動を行う。一八五九(安政六)年、米国伝道会社外国伝道委員会により、リギンズに遅れること一ヶ月、長崎に来る。長崎在任の英米人のための礼拝を執行し、一八六一(文久元)年にはわが国に於ける最初の新教礼拝堂を建設。一八六六(慶応二)年、支那日本伝道監督に推挙される。一八六七年、コロンビア大学より神学博士の学位を授与される。一時帰国後上海に帰任し、武昌、北京、漢口、蘇州、漢陽を伝道基地として開拓し、武昌に定住しながら、日本にもしばしば往来する。明治二月十一日、大阪に居を移す。明治四年大阪古川町に講義所を設け(後の川口基督教会)、翌五年に学校組織に改組して聖提摩太学校(明治十四年英和学舎と改称)と命名し、明治四年に来日したモリスを主任とし、各宣教師が一日一時間乃至二時間教鞭を執った。これは聖公会教育事業の端緒である。明治六年六月にはその生徒数は四十七名に達し、卒業すれば大学南校に無試験で入学できた。後に立教大学に合併された。他方、伝道事業も着々と進捗し、明治五年末より日曜日ごとに日本語礼拝を執行、彼の訳した祈禱文を使用、みずから説教講義をした。明治六、七年には年間受洗者六名を数えている。

明治六年に東京に移り、翌七年に日本専任監査となり、東京、大阪を中心としてその周辺地域に伝道を試み、伝道所、講義所を設け、教会堂を建築し、施療所、病院を開いた。明治七年に築地で始めた学校は、立教大学に発展したし、明治八年に大阪に照暗女学校、同十年東京湯島に女学校(後の立教女学校)、

同二十二年英和学校を創設した。彼は日本人牧師養成の急務を悟り、明治十一年十月英米ミッション共同の神学校を立教学校構内に新設、校長兼教授として教鞭を執り学生と起居を共にし、尽きざる感化を与えた。明治二十八年居を京都に移し、京都聖三一教会、五条講義所(聖約翰教会)、堺聖提摩太教会の主任長老となる。また大阪の伝道女館の校長兼教授として婦人教役者の養成にあたった。明治三十七年に一時帰国、再来日の後、明治四十一年四月帰国。明治四十一年没。「聖餐の友」、「聖書の研究」、「使徒信経問答」、「十誠問答」、「主禱問答」、「洗礼問答」、「堅信礼問答」などを著述した。(昭和女子大学近代文学研究室、前掲書 七七頁～一三五頁、佐波巨編、前掲書二四二頁～五一頁参照) 何故か彼の名はC・M・ウィリアムズと略記されてきている。

(18) James Curtis Hepburn (1815～1911)。妻は Clara M. Hepburn (1818～1906)。日本では通常ヘボンと呼ばれ、平文とも書かれた。プリンストン大学卒業後、ペンシルヴァニア大学で医学を修め、一八三六年医学博士の学位を得る。プリンストン大学在学中に、大学で信仰覚醒運動がおこり、神との関係について真険に考えはじめ、一八三四年冬、ペンシルヴァニアのミルトンの長老教会に入会する。一八四〇年、クレアラ・M・リットと結婚し、翌四一年夫妻で東洋伝道の途につき、シंगाポールで語学の研究と医療に日を送りながら、支那へ入国できる日を待った。一八四三年米支間に開港条約が締結されると、直ちにアモイに渡るが、到着早々マラリヤに犯され、業半ばにして心ならずも帰国した。一八五九(安政六)年、北米長老伝道本部に日本派遣の宣教医となることを願ひ出て許可を得、同年十月十八日に神奈川の成仏寺に居を定め、更に文久元年(一八六一)の春、神奈川の宗興寺を借り、施療院を開いた。門前列をなすほど盛況を極めたが、神奈川奉行がこの状況をおそれ、門前に警備の役人を置いて患者の出入りを禁じたので、この施療院は閉鎖のやむなきに至った。ヘボンの名声を慕う者があつたとせず、成仏寺には役人の許可を得た患者が毎日出入りする始末であった。

文久二年十二月末に、成仏寺から横浜居留地に移り、毎日午前中は二十乃至七十名の日本人患者の診療にあたり、午後は書齋で著述をした。ヘボンの治療に従事したのはおよそ十八年間で、三代目沢村田之助の脱疽手術は極めて有名である。

文久二年秋頃、幕府から高官の子弟九人に、英語で幾何や化学を教授することを依頼された。大村益次郎、沼間守一、原田吾一らがそれで、寺の周囲を竹矢来で囲み、警固の武士に守られたいかめしい授業ぶりだったというが、横浜では、林董、高橋是清、鈴木六三郎、服部綾雄、三宅秀、益田徳之助らが、文久三年十一月にレボン夫人が開いた、ヘボン塾で学んでいる。

慶応二年、「和英語林集成」と「真理易知」の印刷のために上海に赴き、翌年出版。

明治五年に「馬可伝」と「約翰伝」、翌六年には「馬太伝」がヘボン訳、ブラウン改訂、奥野昌綱が版下を書いて、出版された。明治五年九月、新約聖書翻訳委員が定められた時、ブラウン・グリーンとともに外人側の委員に挙げられ、旧訳聖書翻訳委員会の常置委員長として、それらの完成に貢献した。

明治二十年創設の明治学院では、生理学、衛生学を担当し、二十二年十月には選ばれて明治学院の初代総理に就任した。

明治二十四年十月、明治学院総理を辞任し、翌二十五年帰国し、一九〇五(明治三八)年日本政府より勲三等旭日賞を贈られ、一九一一(明治四四)年永眠。

山本秀焯はヘボン博士の業績を、(一)施療院の設立、(二)英和辞書と和英辞書の著述、(三)聖書の翻訳、(四)教育事業の四つを挙げている。(高谷 道男著「ヘボン」、高谷道男訳「レボン書簡集」、佐波巨編、前掲書二五二頁～二八八頁、昭和女子大近代文学研究室、前掲書一七三頁～二四二頁参照)

(19) Samuel Robbin Brown (1810～1880) オランダ改革派教会の宣教師。教育者。敬虔な母親の薫陶により幼い頃から外国伝道に従うことを生涯の目的としており、苦学してエール大学を一八三二年に卒業し、一八三八年にニューヨークのユニオン神学校を卒業。ユニオン神学校卒業と同時に、支那派遣を願ひ出て、設

立間もない支那のモリソン教育協会の専任教師として迎えられ、マカオで支那人教育に四年間従事した。その後、香港に移り、一八三七（天保八）年「モリソン」号で連れ戻された漂流日本人に逢い、日本への関心をもつようになる。一八四七年夫人の健康上の理由で帰国するが、一八五一年頃創設のエルミラ・カレッジ (Elmira College) の設立に尽力し、女子高等教育の開拓者の一人となった。

一八五九（安政六）年、希望が叶えられたブラウンは妻と一人の娘を伴い、上海に向った。ヴァーベック及び宣教師のシモンズも同行していた。上海までの航海中に、二五〇語の日本語が暗記され、片仮名を五十音表に従って書けるようになっていた。上海へ寄港の後、ブラウンとシモンズは神奈川に赴き、ブラウン夫妻はヘボン夫妻の住む成仏寺に偶居を定めた。文久二（一八六二）年、神奈川奉行手付翻譯方石橋助十郎、大田源三郎らとともに神奈川奉行支配役子弟等に英学を教授したが、慶応三年（一八六七）十月の大火により、学校は廃校となり、五月に火災で家を失った彼は一時帰国し、ニューヨーク市立大学から神学博士の学位を授与される。明治二年に新潟英語学校教師として、婦人宣教師のミス・キダーとともに赴任するが、聖書を教えたためか僅か一年で解任され、明治三年には横浜に帰り、英学専門学校として一般の子弟を入学させていた修文館で英学を教授し、都築馨六、佐藤昌介、小野梓、宮野金吾などを教えた。明治六年に契約期限が満ち、再雇用条件で県庁、校長と折り合わず辞任の後、ブラウン塾を開設した。この家塾は旧桑名藩主松平定教の後援により、越後の平松寅吉の金銭的援助もあって誕生し、修文館時代の学生、桑名藩の青年、白石直治、井深棍之助等もこれに加わった。バラの英学校がこのブラウン塾に合併され、バラの門下の押川方義、植村正久等もブラウンの薫陶を受けることになった。ブラウン塾で、ブラウンは聖書と英語を、ブラウンの娘ハティは英国史、米國史、英文学史を、ブラウンの姪のミス・ウィンは代数、地質学等を、オランダ改革派教会から派遣されたC・L・アメルマンが、数学、ギリシャ語、能弁術、神学等を教授し、土・日曜を除く毎日午前八時から十二時までの授業時間は厳しく指導された。

ブラウンは日本語の習得に多大の苦心と努力を払った。その結晶が「コロキユアル・ジャパニーズ」(“Colloquial Japanese or Conversational Sentences”) (文久三年)、「テストタリー・システム」(“Most Prendergast's System Adapted to the Study of Japanese on English”) (明治八年)の諸著となった。

米國聖書協会の事業として明治五年に新約聖書の和訳を決議したが、選ばれて翻訳委員となり、「如何なる日本人も自由に読みうる様に翻訳すべきである」と主張し、文体の平易化を求め、漢字平仮名混じり文に落ちつかせ、かつギリシャ語をもとに翻訳することとし、彼が分担翻訳したのは、使徒行法、ガラテア書、ピレモン書、ピリピ書、黙示録であった。

他に彼は、日本に写真術を導入したし、漢字排斥論者で熱心なローマ字論者として、日本の文字の改良しようとした。一八七九（明治十二）年、健康の衰えにより帰米、一八八〇年に永眠した。(参考文献、昭和女子大学近代文学研究室編、「近代文学研究叢書」第一巻 八九頁～一三四頁、W. E. Griggs “A Maker of the New Orient”)

- (20) Duane B. Simmons (1832～1889)、米國オランダ改革派の宣教師として、ブラウン、ヴァーベックとともに一八五九（安政六）年来日。来日後間もなくして、伝道会社との関係を離れて、開業医となり、後に日本政府の御傭医師となり、横浜十全病院の院長として施術に従事し、後進の医師を薫陶した。福沢諭吉が腸チブスに罹った時、治療し、日本政府から勲五等双光旭日賞を贈られ、品性清潔、質素で、老母に仕へて孝心篤いといわれ、その墓碑には福沢諭吉の撰文が添えられている。佐波亘編、前掲書三四頁～三四四頁参照

- (21) Zeist のこと。昭和女子近代文学研究室編「近代文学研究叢書」3、G・F・ヴァーベックも高倉道男訳「フルベッキ書簡集」の「フルベッキ略伝」および

「年譜」でも彼の生誕地を何故か「ツァイスト」とドイツ風によんでいる。杉井六郎のみが「明治期キリスト教の研究」の四八頁で「ゼイスト」とオランダ音で訓へている。

- (22) William Elliot Griffis, "Verbeck of Japan—A Citizen of No Country" p, 34
- (23) William Elliot Griffis, *ibid* p, 33
- (24) William Elliot Griffis, *ibid*, p, 33° 彼は、ピアノ、オルガン、バイオリン、ギターの演奏にすぐれていた。
- (25) William Elliot Griffis, *ibid*, p, 41
- (26) William Elliot Griffis, *ibid* p, 42 参照。
- (27) William Elliot Griffis, *ibid* p, 38
- (28) William Elliot Griffis, p, 36 (ヘレンは Koppel のルン)
- (29) William Elliot Griffis, *ibid* p, 43~44
- (30) William Elliot Griffis, *ibid* p, 47 参照
- (31) William Elliot Griffis, *ibid* p, 47 参照 当時欧州ではアムビシャス (ambitious) な青年は北米の新天地に移住する傾向があり、ギドロー・ヴァーベックの住むボイストの町でもこの傾向は強かった。昭和女子大近代文学研究室、前掲書 二四五頁、高谷道男編、「フルベッキ書簡集」一〇頁参照
- (32) William Elliot Griffis, *ibid* p, 48
- (33) William Elliot Griffis, *ibid* p, 50
- (34) William Elliot Griffis, *ibid* p, 50
- (35) William Elliot Griffis, *ibid* p, 50
- (36) ヘンリー・ウォード・ビーチャー (Henry Ward Beecher <1813~1887>)。アマースト・カレッジ、レイン神学校に学ぶ。長老派牧師となったが、神学的非難を受け、一八四七年ブルックリンの会衆派のプリマス教会牧師となり、終生そこに留まった。劇的で機知に富み、神の愛を強調する説教によって著名な説教者となった。「アンクル・トムの小屋」の著名ハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe <1811~96>) の弟。日本基督教団出版局、「キリスト教人名辞典」参照。
- (37) William Elliot Griffis, *ibid* p, 51
- (38) William Elliot Griffis, *ibid* p, 52
- (39) 昭和女子大学近代文学研究部編「前掲書 二四七頁」William Elliot Griffis, *ibid* p, 59 ほか参照
- (40) "The Life and Letters of S. Wells Williams" p, 284 cf. William Elliot Griffis, *ibid* pp60~61
- (41) William Elliot Griffis, *ibid* p, 62
- (42) William Elliot Griffis, *ibid* p, 62

- (43) John Scudder は父も娘も宣教医として著名である。彼も宣教医として活躍した。日本基督教団出版局編「キリスト教人名辞典」では、父と娘の項目はあるが、彼の項目は見当たらない。
- (44) Isaac Ferris (1798～1873) は米国改革派教会のミッションの最初の総理で、ブラウン、ヴァーベック、シモンズの三人の宣教使の日本への派遣を決定したと云う。「フェリス女学院百年史」 四一頁
- (45) William Elliot Griffis: ibid pp62～63
- (46) William Elliot Griffis: ibid pp63～64
- (47) William Ashmore (1824～1909) アメリカ・バプテスタ宣教会連合より、中国・タイに派遣された宣教師。南中国を中心として伝道した。
- (48) ヴァーベックは、三地域から派遣された宣教師たちのうちで、ドイツから派遣された宣教師 (Genahr Ferdinand) (1864) 中国名 葉納清らに感心させられた。全ての魂をキリスト教に打ち込む、暖たかい、愛情と同情にあふれる人々だと見ていた。William Elliot Griffis: ibid pp66～67。ゲネール師はドイツのプロテスタント中国宣教師。ライン宣教会に属し、一八四七年香港に到着。ギュツラフ (Gulzlaff, Karl Friedrich August) (1803～1851) 中国名郭実獵。ドイツのプロテスタント中国宣教師) と協力し広州付近で伝道。四九年より伝道の拠点拡大を計ったが、アロー号戦争などのため発展しなかった。日本基督教団出版局、前掲書参照
- (49) Bridgman Elijah Coleman (1801～1861)、中国名 裨治文。アメリカのプロテスタント中国宣教師。アメリカ外国伝道局により派遣され、一八三〇年広州に到着。〈実用知識普及会〉、〈モリスン教育会〉、〈中国医療伝道会〉などを設けた。アメリカの政治・経済などを紹介した彼の著書「聯邦志略」(一八六二)は日本でも翻刻出版され、幕末、明治期の知識人に愛読された。日本基督教団出版局、前掲書参照。
- (50) William Elliot Griffis: ibid pp67～68
- (51) cf. William Elliot Griffis: ibid p.81
- (52) 一八六〇(万延元)年一月一日、長崎発の神学博士アイザック・フェリス師宛のヴァーベックの書簡中に
「少なくとも、わたくしはここに、ほとんど三カ月もいますが、長崎は、わたしには、出島もオランダ人も直接関係ないと思われ、将来も、そうだと思います。以前からいるオランダ人にもわたしたちの働きは靈的な益であることを喜びとしますが、それよりも、日本人にキリストの福音の使者として召命をうけたことを、わたしは本当に喜びとします。さらにまた、日本の宣教に直接反対を表明した人物、すなわち、ドンケル・クルチウスは、シャムにオランダの条約を締結するため、この国を去ろうとしています。再びここに帰ってこないでしょう」と、書いており、日蘭条約の調印名たる、ドンケル・クルチウスが、キリスト教の宣教に反対し、またオランダがキリスト教の伝道活動をしないという条件で、日本との外交関係を保持してきたことに対して、ヴァーベックが非好意的であったことを示している。高谷道男編訳「フルベッキ書簡集」二四頁
- (53) 高谷道男編訳、前掲書、二五～二六頁、一八六〇年二月一七日付書簡cf. William Elliot Griffis: ibid p.89
- (54) H. E. Schmidt. 一八五九(安政六)年米国聖公会伝道局の宣教医募集に応じ、一八六〇(万延元)年四月長崎に渡米した。事業は成功したが、健康を害し、また伝道局の南北戦争による資金不足により、僅か一年半余の滞在で、一八六一(文久元)年帰国。

G・ヴァーベック論(1)

(55) 一八六一年二月六日、長崎発書簡、(高谷 道男編訳、前掲書、三五頁参照)
 (56) マーチン (William Alexander Martin (1827~1916))。中国名 丁建良。アメリカの長老派の宣教師。一八五〇年中国に渡り寧波、上海、北京に伝道。また同文館教授となり、一八九八年には北京大学総長となり清国政府顧問を歴任す。英・漢文の著述多数あり、『万国公法』、『富国策』、『諭道論』、『性理略論』、『格物入門』などは、幕末から明治初期に和刻、和訓されて、日本の国際法知識普及に寄与した。また教理書『天道溯源』は中国の代表的布教書であり、日本のキリスト教発展に大きな貢献をなした。

(57) 高谷道男編訳、前掲書、三九頁

(58) ベッテルハイム (Bernald Jean Bettelheim (1811~1870))。プロテスタント系の日本最初の開教者。ユダヤ家系の出でハンガリー生まれ、国籍をイギリスに移す。海軍琉球伝道宣教師として那覇に來たり(弘化三二一八四六年)、迫害、飢餓など多くの困難のうち路傍伝道をなしたが、ついに実を結ばず、聖書翻訳に努め、四福音書その他を琉球語(方言)に翻訳した。安政元(一八五四)年、ペリー艦隊に便乗して琉球を去った。ルカ、ヨハネ福音書の琉球訳は香港で出版され(安政五二一八五八年)、後に日本の標準語に改められ、ウイーンで改訂出版された。

(59) 高谷道男編訳、前掲書 三九~四〇頁

(60) 高谷道男編訳、前掲書 四一~四四頁

(61) 高谷道男編訳、前掲書 五五頁

(62) 高谷道男編訳、前掲書 五七~六一頁

(63) 高谷道男編訳、前掲書 六三頁

(64) William Elliot Griffis: *ibid.*, p.54

(65) 高谷道男編訳、前掲書 六七~七一頁

(66) 例えば 豊臣秀吉の「伴天連追放令」は

一、日本は神国たる処きりしたん国より邪法を授儀太以不可然事

一、其国郡之者を近付門徒になり神社仏閣を打破らせ前代未聞候。国郡在所知行等給人に被下候儀者当座之事情。天下よりの御法度を相守諸事可得其意処下

下として猥義曲事事

一、伴天連其智慧之法を以心さし次第ニ檀那を持候と被思召候へば、如右日域之仏法を相破事曲事候条、伴天連之儀日本之地ニハおかせられ間敷候間、今日

より廿日之間ニ用意仕可帰国候。:

と、示し、徳川幕府は、「切支丹禁制の制札」を掲げ

きしたん宗門は累年

御制禁たり自然不審

成者これあらば申出へし

御ほうひとして

はてれんの訴人 銀五百枚

いるまんの訴人 銀三百枚

立かへり者の訴人 同断

同宿并宗門の訴人 銀百枚

右之通下さるへしたとひ同宿

宗門之内たりといふとも申出る

品により銀五百枚下さるへし

かくし置他所よりあらはるるに

おみては其所の名主并五人組迄一類共に

可被行罪科者也

正徳元年五月 日

奉行

(正徳元年は西歴一七一一年で、六代將軍家宣の時期で、大老は井伊直該であった。) 田丸徳善・村岡空・宮田登編、「近代日本宗教史資料」 五九〇頁より引用。この「切支丹禁制の制札」は、明治政府にも引き継がれ、「五傍の高札」の第三札で

切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ若ク不審ナル者有之ハ其筋之役所ヘ可申出御褒美可被下事

慶応四年三月

太政官

〔法令大全書〕慶応三年(明治元年、六七頁所収)と、示され、一八七三(明治六)年二月二十四日までこの高札は撤去されず、維新政府も、「切支丹」邪宗門」観を継承し、国禁として位置づけた。

(67) 高谷道男編訳、前掲書、七二〜七三頁

(68) 高谷道男編訳、前掲書、七三頁

(69) 高谷道男編訳、前掲書、八五頁、八七頁

(70) 高谷道男編訳、前掲書、七〇頁

(71) 高谷道男編訳、前掲書、七七〜七八頁

(72) 高谷道男編訳、前掲書、九一頁

(73) Rev. Philip Peliz (18823~1883)。米国改革教会牧師。一八四五年ペンシルヴァニア大学卒業。四七年ニューブランズウィック神学校卒業。六六年ユニオン・

G・ヴァーベック論(1)

G・ヴァーベック論(1)

カレッジから神学博士の称号を与えられた。四八年フィラデルフィアで任職、五一年までニューヨーク州コエヤマンおよびニュー・バルチモアで牧師。六〇年から六五年まで同教会外国伝道局主事。

- (74) 高谷道男編訳、前掲書、九二～九三頁
- (75) 高谷道男編訳、前掲書、九七～九八頁
- (76) 高谷道男編訳、前掲書、九八頁
- (77) 高谷道男編訳、前掲書、九八～九九頁
- (78) 高谷道男編訳、前掲書、一〇三頁
- (79) 拙稿、「致遠館の周辺」二一～二三頁、大手前女子大学論集第2号所収
- (80) 高谷道男編訳、前掲書、一二五頁
- (81) 「大隈伯昔日譚」(一五七～一五八頁文中のウヰリアムはCh・M・ウヰリアムズのこと。註(17)参照
- (82) 高谷道男編訳、前掲書、一二七頁
- (83) 高谷道男編訳、前掲書、一三九頁
- (84) 高谷道男編訳、前掲書、一四一～一四二頁 仏僧の名は清水宮内である。
- (85) Henry Staut (1838～1912)。米国改革派宣教師。一八六五年ラトガース大学卒。六八年ニューヨークブランズウィック神学校卒。六八年一月牧師に任ぜられる。米国改革派教会外国伝道局より派遣されて明治二年三月一〇日長崎に到着。広運館で教育にあたる。明治九年長崎一致基督教会を設立。同一九年東山学院設立。同三二年院長に就任。